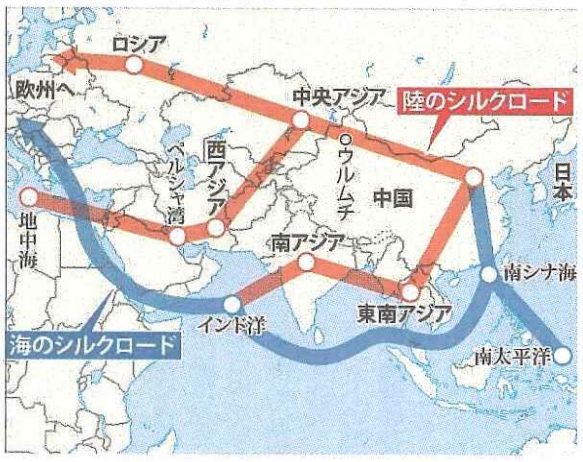
橋梁の海外展開　新たな動き

シルクロード経済圏・一帯一路のイメージ



メコン経済回廊のイメージ

	AIIBに参加を表明	表明せず
G20	中国　韓国　トルコ　インド ブラジル　ロシア　インドネシア サウジアラビア　オーストラリア	南アフリカ メキシコ アルゼンチン
うちG7	英国　フランス　ドイツ　イタリア	日本、米国、カナダ

相手国の問題解決する鋼橋を

日本橋梁建設協会　海外特別委員会　河嵜祐之　委員長

橋建協　海外特別委員会　河嵜祐之委員長

――委員会の役割は

河嵜委員長　海外における鋼橋市場への参入と日本の鋼橋技術の売り込みだ。民主党政権で日本のインフラを輸出しようとなり、安倍政権にも引き継がれ、どんどん輸出していく方針になった。昔のODAはポリシーが違って地産地消、相手国の物を使って作ろうという発想だった。発展途上国に鉄鋼業はなく、自然にPC橋になった。それが180度変わった。今は完全に日本に受注させようという発想。日本の技術を使った質の高いインフラをODAで出し、企業の技術力も育てようという流れに。そういう意味で鋼橋のニーズが非常に高まっている。

――ターゲットは

河嵜　基本は相手国の問題を解決するのに鋼橋がマッチするケースを探して提案すること。鋼橋の強みは品質の安定性、工期短縮。渋滞する都市部で交通を極力止めずに急速施工で立体交差を架けるとか、過積載車がどんどん走り床版が壊れやすい所には合成床版を、メンテが難しい所には耐候性鋼材の橋を薦めるとか、ニーズはある。こういう案件を日本政府が探しているし、我々も経産省の案件発掘のための補助金で調査している。耐候性鋼材の橋は計画中のいくつかの案件でも採用されている。コストについては個社で現地に工場を持つなど、相手国が採用しやすいプライスに近づける努力をしているところだ。

――課題は

河嵜　主に3つ。現状で国内需要の水準が高いレベルで推移している。現地で指揮監督する人が足りない。プロマネを日本の会社から出すのは当然として、その下の実務のエンジニアも日本の技術を持って現地でやるので、日本の技術を知らないとできないが、その人材が不足している。

2つ目。国内は分割発注で出てくるが海外は橋の基礎と鋼橋と取付け道路が一括で出る。この発注の違いが、国内市場を守るとも言えるが、海外展開を遅らせる。対応する会社はそれなりの準備が要る。土木のどの会社と組むかとか、地域も今年はフィリピン来年はインドと変わると、陣容としても対応が厳しい。

3つ目。国内で10年以内に完工した吊橋・斜張橋他特殊形式の橋梁実績が消えつつある。入札時に施工実績の年数を10年以上に遡るとか関係機関に善処を願いたい。

ASEAN成長見越し人材供給

日本構造エンジニアリング　須々木勝重　社長

日本構造エンジニアリング　須々木勝重社長

――建設業の人手不足に応える人材供給に加え将来の海外展開にも応える「日越人材開発雇用促進プロ」を始めました

須々木社長　国交省の2014年度の中小企業の海外展開事業に応募し、視察先がベトナムだった。自社の人材が欲しいと参加したが、他の参加企業も人材不足だった。そこで自社の人材確保だけでなく、人材を育てて供給する事業を始めることにした。これからASEANは伸びてくる。この域内で活躍できる人材を、という発想でまずベトナムから始めた。ASEANの留学生や求職者の支援を手掛けてきたNPO法人MP研究会、日本語教師養成学校の日本語学校アルファ国際学院、橋梁設計会社の日本構造エンジアリングの3者で進めている。

ベトナムの学生は普通にCADができる。少子高齢化が進み生産性の向上が求められるなかで日本の建設業も今後、CIMやBIMを使い、建設システムの効率化を図る方向に進んでいる。ここにダイレクトに供給する人材をと考えている。

プログラムの対象はハノイ土木大学の大学生と卒業生。第一期生の今期は募集を60でかけ、150人が応募、最終的に51人に絞った。教えるのは日本語と日本仕様の土木やAutodesk Revitを使ったCIM・BIMと3DCADの知識。日本でいえば東京工業大クラス。優秀な学生が多く吸収が早い。

――欲しい人材と供給する人材のマッチングは

須々木　一期生なので取引のある企業にニーズをお聞きして抽出、コアな部分に応えるプログラムとしているが、今後事業展開していく中で、企業側からでてくる個別ニーズにも対応する。

――人材紹介後のフォローアップは

須々木　そこがこのプログラムの強みのひとつ。ハノイ土木大学の学生たちは将来国を背負って立つような人たち。日本企業で働き、将来帰国して同業や役所で働くようになることもある。そのなかでこのネットワークを長期的に良い関係にしておく、こういうところに非常に意味がある。ある程度育てて紹介したら終わり、ということでなく、巣立って日本企業で働く卒業生のフォローや採用企業のフォローも情報交換などを通して進める。帰国後もつながりが良好に継続するようフォローしたい。

差別化、保全サービス転換　カギに

日本経済団体連合会　梶浦敏範　氏

日本経済団体連合会　梶浦敏範氏

――業界は震災復興や五輪需要で今のところしっかりした内需があるものの五輪後、海外展開やメンテ時代に合わせた構造転換に直面します

梶浦氏　新興国では日本の精緻な技術とかグッドフィーリングなものはほとんど受け入れられない。局地的に求める人もいるが、結局海外展開したインフラで成功しているのはG7、先進国向け。橋について言えば差別化を考えることが必要ではないか。災害時に早く架けるとか、何か特別なケースに対してなら絶対負けない価値を企業ごとに作らないと生き延びられないと思う。コスト勝負は限界がある。

保全対応に関しては、多くの事業が製品を作って売ることから保全を含むサービス提供に移っていることからも、重要性は明らかだ。例えばエレベータやコンピュータなどがそうだ。最初は製品で利益が出るが、外国勢も参入して競争が激しくなり値段が下がる。世界市場は増えていても利益が出ない。保全サービスに転換していき、それも人手からリモート制御にしてなんとか国際競争力を保っている。今好調と言われるIT業界でも、ハードウエアのみの企業は不調だ。サービス事業を強化し、何か世界で通用する強みを持たないと生き残れない。

日越人材開発雇用促進プロジェクト

建設・土木分野
ベトナムトップの大学の
日本語の話せる
エンジニアを
日本での戦力として
採用してみませんか

★ ベトナム現地面接会のご案内 ●

1月28日・29日 現地面接会開催

国内事前説明会実施　12/2（水）15：00～
場所：アルファ国際学院 虎ノ門本校
事前予約制：03-3504-8080

お気軽に
お問合せください

プロジェクト 事務局（田中・剣持）
03-3556-2344（MP研究会内）
vietnam-saiyo@mpken.jp

ハノイ土木大学　日本構造エンジニアリング　アルファ国際学院　NPO MP研究会

WORK IN JAPAN